第３回環境被害に関する国際フォーラム

基調講演

第３回国際フォーラムの課題：失敗の教訓を将来に活かす

花田　昌宣*

熊本学園大学水俣学研究センター長

水俣学研究センターの花田です。私の報告の基調は、水俣病問題の「解決」あるいは「将来構想」をどう考えていくのかということなのですが、議論の基本は、被害者の尊厳を大事にすること、そして多くの人々の共同の決定が重要だということです。くわえて、水俣で水俣病問題をめぐって何が起きているかということもお話しします。

水俣病の解決策を考えていくという点についてですが、国や県レベルでいろいろな委員会が立ち上げられたりしました。2010（平成22）年には宮本先生が紹介された「環境まちづくり研究会」（座長・大西隆東京大学教授）が作られました。これは地域の社会経済構造の将来像を考えようという検討会で報告書も出されています。ただ、私の知る限り、この種の会議や委員会の中に、被害者団体が入ることは一度もありませんでした。「環境まちづくり研究会」ですが、東京大学ばかりではなく九州大学、熊本大学、熊本県立大学、東海大学、中央大学などいろいろな大学の研究者も集めましたし、チッソや肥後銀行も入っています。ただ、患者団体と水俣市内に研究センターを置いている熊本学園大学だけ入りませんでした。水俣病の事あるいは水俣のことを研究していない大学の先生達が多く来ていましたが、わたしたちのところには案内さえ来ていない。私たちは、それまで地域戦略プラットフォームという市民協働の研究会を作って活動をしていましたので、この研究会に呼ばれた先生方の中でおかしいと思った方々もおられ、連絡もいただいたのですが、私どものほうからあえて問題にすることはありませんでした。

失敗の教訓を将来に活かすとは

さて、私のテーマは「失敗の教訓を将来に活かす」という話です。水俣病の発生が確認さ

*1952年大阪府生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学。パリ第７大学経済学研究科高等研究学位取得、フランス国立東洋言語文化研究所日本学科専任講師、ルアーブル大学国際貿易学部専任講師、パリ第13大学経済経営学部専任講師を経て、1994年より熊本学園大学社会福祉学部教授。2007年より水俣学研究センター事務局長、2012年より水俣学研究センター長を務める。熊本県部落解放研究会会長、社会福祉法人くまもと障害者労働センター理事長。1974年より水俣病問題に取り組み、故原田正純教授らとともに、水俣、カナダをはじめ様々な調査をおこなう。水俣病以外に、障害者問題、ハンセン病等についても人権の視点から研究を行っている。さらにフランスの社会的経済について共同研究を進めている。

れて63年になります。世代でいうと二つの世代を経たことになります。しかし今なお解決していない。どんな問題があるのかをいくつか挙げますと、大量の水銀が埋まっている水俣湾の埋め立て地の問題、認定されていない患者の補償や救済、そして、水俣病に対する偏見や差別の問題などです。これらの問題は海外、世界中で起きているさまざまな公害事件と共通するところがあると思います。だからこのような国際的な集まりを持って議論をしていきたいと思います。

例えば、中国の文明の発祥の地といわれている淮河（黄河と揚子江の間の大平原を流れる大河）における環境汚染の問題です。「癌の村」と言われていて、健康を奪われた人々がたくさん住んでいるコミュニティがいくつもあります。フォ ダイシャンさんの報告がありますが、そこで今課題になっているのは、川を浄化していく、健康を取り戻していく、生活を取り戻していくということで、市民グループによる取り組みがなされています。

カナダですが、今回、二つの先住民のコミュニティから来て頂いています。ここで公害事件が発生しており、垂れ流された水銀によって健康が奪われています。カナダでの報道を見ますと、昨年から汚染された水系の浄化の試みが始まっています。つまり、被害に対する賠償からはじまって、環境そして生活を取り戻す試みが海外でもなされている。それについては日本の公害被害地でも考えていかないといけない。こういう話になっていくと思います。

私たち水俣学研究センターがなぜこういう集まりをするかというと、晩年の原田正純先生と一緒に考えていたことから始まります。この写真（写真）はカナダの先住民居留地の一つのグラッシーナロウズのヘルスセンターで検診している際に事務所で撮ったものです。2010（平成23）年です。これが原田先生の最後のカナダ訪問になりました。

写真　2010年カナダグラッシーナロウズでの原田先生

水俣学研究センター撮影

原田先生が考えていたことは、公害の問題、環境問題を考えるに当たって現場が大事ということでした。そして住民が、専門家ではない住民が加わることが大事。そのうえで、国際的に繋がることが大事だと言っておられました。

国際的に繋がる

国際的に繋がることを考えて世界の14カ国・地域から集まって、2006年に第１回目の環境被害に関するフォーラムを開催しました。繋がっていたのは、カナダもインドネシアも韓国も台湾も中国、いろんな国々の原田先生のネットワークによるものでした。

その後私たちも原田先生と一緒に少しずつ日本国内、海外の公害発生地域を回りました。そして私たちが回るだけではなくて、そこで出会った人々と集まって、そして横に繋がっていこうということが私たちの試みであります。今回の第３回の国際フォーラムもそういう意味を持っています。

最終的な到着点ですけれども、国際交流、こういった意見交換を私達が目指す将来をどう作っていくかという議論にしたい。「被害を受けた人達の健康と権利の回復。そこから更に公正と正義を実現していく」、この研究集会の根本的な目標はこれであります。そのために意見の交換、そして情報の共有を行い、そのうえで共に汗を流していきましょう、ということが課題になっていくと思います。

明日は移動日ですので、もし水俣に明日から行かれるのであれば、チッソの旧工場、最初の工場を見に行かれてはどうでしょうか。昔の建物としてはこれだけしか残っていません。100年前の工場です。今、水俣病を引き起こしたチッソの工場、いろんな所が少しずつ壊されていって、どこで水俣病が起きたか分からなくなりつつあります。

水俣に行かれた方は分かると思いますけど、水俣病についての看板は水俣の町の中にはほとんど立っていません。長崎、広島に行きますと、原爆ドームがあり、ここが被爆の土地である、場所であると、いろんな看板、掲示板、記念碑などが立っています。水俣に行きますとほとんど目にすることがありません。水俣の鉄道の駅を降りますと、水俣病についての看板は１つもなくて駅前に地図があります。その中に、国立水俣病総合研究センター、水俣病資料館の２つが書いてある。これだけが水俣の駅前にある水俣病を示す看板。だから何も知らずに訪れると、何もなかった町のように見える。ただ、こうした工場の跡がいくつかあります。そうしたことから考えていく必要があるかなと思います。

水俣病事件における失敗の数々

それで、先ほどの宮本先生の話と少し重なりますけど、これだけはお伝えしておきたい。水俣病事件の失敗は何だったかというのを数えました。８つあるかと思います。

(1) 水俣病の被害の発生防止。予測できていた。

もちろん一番最初は予防原則というものがなかったので、水俣病の被害が発生した。この事実が第一の失敗です。２千何百人という認定された患者さん達。あるいは６万人あるいは７万人といわれる被害者。こんな大きな公害事件が実は発生してしまったということが第一にあげられます。

(2) 被害、汚染拡大防止措置を取らなかった。

発生しただけではなくて、水俣病が発生したことが分かった後からでも、拡大防止策が何も取られなかった。水俣病事件の歴史の中で、政府や行政が工場に対して「排水を止めなさい」と命令をしたことは一度もありませんでした。工場排水が止まった1968（昭和43）年まで水俣病の発生が分かってから12年間、工場は有機水銀を含んだ水を流し続けて

いたのです。

(3) 被害者への補償・救済ができていない。

被害者総数もわかっていない、部分的にしか救済されていない。

そして、被害者に対する補償や救済がきちんと出来ていないという事実があげられます。そもそも、あの地域全体で水俣病の被害者が何人いるか分かっていない。現在認定された患者数（2,300人程度）、救済策による給付を受けた人数（全体で７万人程度）が発表されていますが、それらは全て本人が名乗り出たもので、まだ隠れている方々はかなりの数に上ると考えられます。

(4) 情報の秘匿。

その背後にあるのは情報を隠しているということがあるものと思われます。

(5) 調査の不十分さと記録隠し。

くわえて、調査が不十分、あるいは調査のデータを明らかにしないというような事が起きている。

(6) 被害地域、被害者の住む地域の再発展。

宮本先生が既に指摘されたことですが、被害地域の社会的な発展、経済的な発展が考えられなければなりません。被害者救済と並んで地域の発展は国の政策だったはずですが、経営破綻しているチッソ支援ばかりに目がいっていて、内発的な発展、住民主体の開発がどこまで考えられたのでしょうか。

(7) 被害・公害を繰り返さないこと　繰り返し起きている。

そして何よりも被害、公害を繰り返さないことです。ところが水俣病の場合には熊本で1956（昭和31）年、水俣病が起きたことが分かった。それから10年後に新潟で水俣病が起きてしまった。実は同じ頃中国、黒竜江省でチッソと同じ工程を持っていた工場が原因で水俣病が起きています。水俣で1956（昭和31）年に明らかになった後も、色んな国で色んな公害が次々に起きている。これも失敗の原因というふうに思います。

(8) 海外での公害事件の発生。

水俣病以降も各国で公害が発生しています。水俣病の失敗を開発途上国を中心に海外に早く伝えていれば、抑えることのできた公害事件もあったのではないでしょうか。

今、８つの失敗をお話ししましたが、これは水俣病だけに限ったこと、日本だけに限ったことでしょうか。今回参加されている中国や韓国にも共通するところがたくさんあるでしょう。だから水俣病の失敗の教訓を考えていく必要があるのです。

最後に、「水俣病公式確認60年アンケート調査」についてふれます。これは、今日初めて公開したものです。私共が２年前の2016（平成28）年にアンケート調査をした結果報告です。

どういう調査をしたかというと、水俣病の被害者達約8,900人に郵便で調査票を送ったものです。調査対象者が多いのですが、水俣病の被害者の団体に加入している人々全てに対して送るとこれぐらいの数になりました。回収できた数が2,619。被害者に対して直接こうし

たアンケート調査をしたのは、実は水俣病の研究の歴史の中では初めての事であります。

公害事件による差別と偏見：大規模アンケート調査より

このアンケート調査では、健康状態から社会生活、将来への期待など様々な質問がありますが、一つ重要なポイントを紹介します。それは、水俣病における差別と偏見という話であります。水俣病を抱えている水俣、その周辺の地域、そこから離れた人も含めてですけど、多くの人が自分の水俣病のことを他人に隠していて、語ることが出来ない。子供や孫にも語らないという現実が浮かび上がってきました。

なぜか。水俣病に対する偏見、蔑視がなお強いということなのです。水俣病は地域で起きています。水俣市あるいは隣の市町村。水俣病の被害者がたくさんいる地域でもなお水俣病に対する偏見が根強いのです。

２つだけ表を出して説明します。

「水俣病の被害を受けてつらかったこと」という設問に対する回答の中で（図１）、「水俣病に対する差別や偏見」が19.2％、「世間に無視される」「無関心である」が14.5％あります。「自分の子供が水俣病だったらどうしようかという心配」（30％）という回答も実は差別や偏見を恐れてのことだろうと考えられます。回答票の中には、たぶん高齢の方が一生懸命書かれたと思われるのですが「ニセ患者」と陰口を言われたというのもありました。補償金や一時金をもらったことを非難される、すなわち被害を受けて補償や救済を受けたことを非難される経験を多くの方がしています。犠牲者が非難されるという逆転したことが起きていると言えましょう。

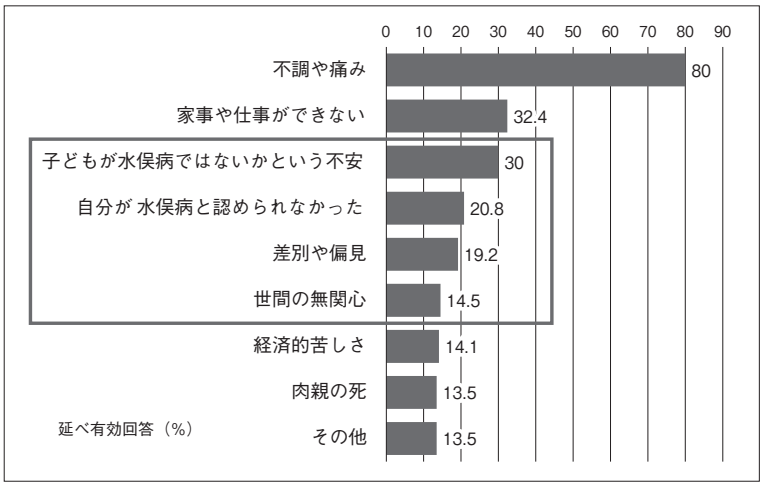

図１　水俣病被害を受けてつらかったこと

出典：『水俣病公式確認60年アンケート調査　最終報告書』2019年より作成

水俣病患者さんは「家族内でしかしゃべらない」とよくいわれます。そこで「自分の被害の経験を誰にしゃべっているか」というふうに設問を置きました。そうしますと、「夫や妻の間だけで話している」人が30％、「子供や孫と話している」人が20％、50％の人が「家族の中だけでしか話せない」、「誰にも話したことがない」という人が5.9％、「近所の人に話せる」人は５％ぐらい。水俣病について何故しゃべれないのかな、というふうに思いますけれども、やはり差別や偏見が怖い、誹謗中傷が怖い、理解してもらえるとは思っていない。これが今の水俣病に対する見方だと思います。

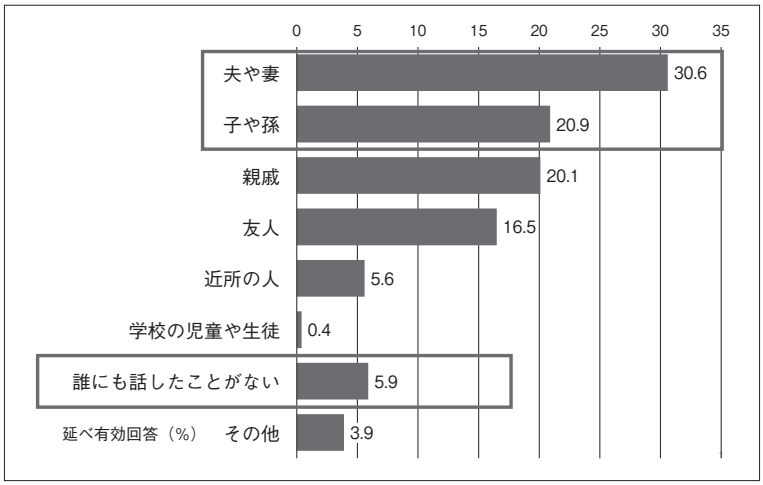

図２　水俣病被害の経験を話した相手

出典：『水俣病公式確認60年アンケート調査　最終報告書』2019年より作成

このような調査結果をみておりますと、水俣病問題について60年経って何か前進したかな、何か解決したかなとすら思います。私たちがアンケートを取ったうちのなんと４分の３が「水俣病問題は解決していない」と答えています。これが被害者達の実感です。

最後にこういった調査に基づいて、私たちは将来の構想を考え多くの人と共有していきたいと思います。その原則は何かというと、公開、公正、そして被害者の尊厳です。これを大事にして考えていきたい。こういったことがこの２日間の国際フォーラムのベースになればいいと思っています。ありがとうございました。

参考文献

・原田正純、花田昌宣編『水俣学研究序説』藤原書店、2004年。
・原田正純、花田昌宣編『水俣学講義 第４集』日本評論社、2008年。

第３回環境被害に関する国際フォーラム

セッション１　被害の現状報告

ヴァバシムーンのこれまでと現在

マーヴィン リー マクドナルド*
カナダ先住民　ヴァバシムーン代表

はじめに

ボージュ（Boozhoo, アニシナベ語でこんにちは）。

まず私自身のことを紹介したいと思います。今回このように招へいを受けまして熊本、水俣に参りました。大変光栄に存じております。

私は私のコミュニティを代表して今日ここでお話しするんですが、実は私たちの長が今回どうしても来ることが出来ずに、私に話をせよということで、これまでにも熊本にも日本にも何回か参っておりますので、ここでお話しすることを大変光栄に、また嬉しく思っております。

私はリトルウルフと呼ばれています。私の名前です。私はカナダ先住民の一つの部族から来ています。今日は私が住んでいるコミュニティの話を皆様にしたいと思います。

少し歴史をさかのぼってお話します。1873年、カナダ政府と先住民との間で第三条約が結ばれました。いくつもの条約が結ばれています。その交渉の中で、カナダ政府が我々先住民に言ったことは、「太陽が輝きそして自然がこのままである限りこれは続くものである」という説明でした。そして数年後、さらに別の条約も結ばれています。

私の祖父についてお話をします。私の祖父は1903年に生まれました。彼は伝統的な暮らしをしておりました。もちろん狩猟であるとか魚を獲ったりとか様々な我々の伝統生活をしておりました。

私は長老にこれまでに起きてきたことをどのように感じるか、と問いかけたことがあります。その長老の女性が、次のような伝説を話してくれました。

ワンマンレイクという集落がありますが、このワンマンレイクの精霊が河川を守る守護神

*ヴァバシムーン（かつてホワイトドッグとよばれたカナダ・オンタリオ州の先住民居留地）に生まれ育つ。ヴァバシムーン（Wabaseenmoong）は先住民コミュニティ（Indian Reserve）の一つ。正式には、ヴァバシムーン独立国（Wabaseemoong Independent Nations）と呼び、オンタリオ州の西部に位置する。
この居留地はイングリッシュ・ワビグーン水系に位置しており上流のドライデン市にある製紙工場が流した水銀に汚染されており、1975年より原田正純医師および熊本学園大学チームによる継続的現地調査によって水俣病が発生していることが確認された。1986年に先住民組織、州政府、製紙工場の三者で交渉が妥結し、一定の補償がされるようになった。報告者のマクドナルドさんも被害者の一人。かれは現在、イングリッシュ・ワビグーン水系の水銀汚染の浄化と環境復元のための委員会の委員を務めている。

なのです。ある日、一人の女性とその娘が魚をとる網を仕掛けていました。その時、男がカヌーを漕ぎながら近づいてくるのが見えました。そして女性二人が彼に挨拶をしようと振り返った時に、その男は水の中へと消えていきました。精霊だったのでしょう。

私たちはそのワンマンレイクに住んでいました。でも今はもう誰もいません。ここでは1950年に洪水が起こり、そして1960年には河川の汚染が広がるようになってしまった。そして、今は、ほんの数名の私達だけがここで祝い事をしたりお供えをワンマンレイクの精霊に対して行っているだけです。

ヴァバシムーンは「ワンマンレイク」、「ホワイトドッグ」、そして「スワンレイク」と三つの集落から成り立っていますが、みんな川に住んでいる民です。私はそのことについてお話をする前にまず先ほど言いました1950年の洪水について一言ご説明したいと思います。

私の母の話をします（写真１）。私たちはみんな「川の人」と呼ばれ、川を生活の中心において暮らしています。母が若い時には、この川は全て美しく、その水を飲んだり、魚を取ったりしながらの生活がありました。しかし、この洪水のために、ものすごい汚泥が流れ出して、もはや川の水は全く美しく清潔ではなくなってしまいました。私たちはまた、農業を営む民でもあり、野菜を育て、あるいは狩猟し、そして川で魚を取って生活をしているのですが、この川の洪水が起きてしまったがために、私達の伝統生活が壊されるはめになりました。私は、母が話してくれたことをしっかりと覚えていますし、私たちは皆同じ仲間としてその話を大切に暮らしています。

写真１　私の母

私たちの村の暮らしと水銀汚染

私達は河川の汚染と水銀被害をひきおこした製紙工場を訴え、一定の補償も受けましたけれども、決して十分なものではありませんでした。この被害は45年前から起きているんですけれども、まだ現在もこの状況が続いていると言わざるを得ません。部族の仲間達の何人かはカナダの医者によって検診、検査を受けて、そしてこの水銀中毒による症状が出ているということで補償を受けました。

この水銀中毒については、州政府によって予防し、被害が起こらないようにするという施策が行われました。イングリッシュリバーという所では、商業的な漁業の禁止措置がとられました。そのエリアではウォールアイという魚（スズキの一種の淡水魚）がよくとれるのですが、これは我々にとっては主食と言えるほどの大事な魚であります。しかし、漁獲禁止がまだ出たままなんです。

私たちの仲間達は、川に関わる仕事をずっとたくさんしてきています。例えば商業的な漁業ばかりではなく、休暇用の別荘（ロッジ）などの清掃、川沿いで荷物の上げ下ろしなどもありますし、釣りのガイドとしての仕事もありました。さらに動物を捕える罠を仕掛けたり狩猟をしたりなどいろんな仕事に関わってきました。

ところが、水銀汚染が発生し、漁業が禁止されました。このことを聞いたアメリカ人達が来なくなった。それまではアメリカなどから来る人達がたくさんいたんですけれども、その彼らのツーリズムが全く下火になってしまいました。

これはまさに、会社の水銀の排出が作り出したことでした。漁業が出来なくなった。これは、この地域にとりましては重要な産業、重要な仕事を失ってしまう、ということを意味していました。

45年が経過し、その間ほとんど何も、この問題を解決するための事が行われてこなかったのですが、2017年の12月、一つの法律、被害と損害を修復するための基金に関する法律がオンタリオ州で通りました。

我々のリーダーがいろいろと交渉をしているんですけれども、政府の人間と、それから公害を起こした会社の人間が一つの車に乗って私達の所にやって来ました。そして同じテーブルについて話を始めます。それは私達にとってはまさに巨大な力との戦いであります。

イングリッシュ・ワビグーン・リバーの修復に関する法律についてちょっとお話をしたいと思います。この法律は川を修復するためにお金を投下するという事なのですが、実際にはそんなこと出来るはずないと私は思っています。実際に8,500万カナダドル（約65億円）というお金がその修復のために準備されることになりました。

私のコミュニティと、姉妹関係にありますもう一つの部族（グラッシーナロウズ）と一緒にこのパネル委員会に出席していました。そこでは、実際にイングリッシュ・ワビグーン川の水銀だけでなく、他の汚染物質に関しても議題に上っていました。議題の中に河川の浄化事業があり、本当に記念すべきものであります。それが実現して、安全であるならば、大変記録的なことになります。その法律には魚をいかに安全に食べるかという指導もあります。例えば安全レベルや食べてよい魚の量でありますとか、病人、あるいは妊婦さん、小さい子供達がどのぐらいの量までなら食べてもよいか、そういうようなことの記載もありました。

水銀の汚染が実際に起きているのですが、ただ魚を常食していた人達にとっては、魚を食べないということは大変深刻な問題になります。なによりもまだまだ私達の生活にとって、この魚というのが主食であるわけですから。

私の妻と私は、写真の中の若い女性、姪ですけど育ててきました（写真２）。小さな男の子が写真の中で見えますか？ 前回、熊本に来た時にこの男の子は生まれたんです。私が日本にいる時に、このフォーラムで話をしていた時か、あるいは空港にいた時でした、私の娘がこの子を出産しました。そしてもう一人の娘が昨日、出産致しました。私が日本に来るたびに孫が増えていきます。今現在９人孫がおります。

私の娘は水銀の中毒による健康障害で補償を受けております。補償を受けるよりももっと

写真２　姪と孫

健康な体の娘でいて欲しかったと思います。娘は、２歳になる位まで歩くことができませんでした。今でも特徴のある歩き方をします。出来るだけ普通に歩けるようにということで、彼女の靴に特別な装具をつけています。私たちのところでは子供はボーイスカウトやガールスカウトに参加することが多いのですが、娘がガールスカウトに参加していた時には、長時間立ち続ける事も出来ず、大変難しい時を彼女は過ごしていたと思います。

彼女の顎の線といいますか、独特な形をしています。喜びを表現したい時に、彼女はなぜか発作のような状態になってしまいます。また何か嬉しい事がある時には、指を動かすような動作を示します。彼女には、まわりの雰囲気が変わっていくという事が、とても難しい状況を引き起こすわけです。彼女は難聴で、聞く力があまりよくありません。

母が私に、何か悪いことがたくさんあっても、出来るだけよい面をとらえていこうと教えてくれていました。以前、ハロウィーンの時に、変装をして子供たちにトリック・オア・トリートをさせたということがありました。彼女に水銀のことをどう思うかと尋ねたことがあるのですが、とにかく息子にこれが引き継がれないように、それを強く願うという答えでした。これ彼女、娘と子供の写真ですけれども、大変大事な写真なんですね。

私たちの民にとりましては、政府の人達との様々な交渉は戦う様な状況になってしまいますけども、それを乗り越えていくというのは、大変難しい困難な事なんです。

先ほど話した私の母なんですけれども、その写真です。たぶん私と似ているのがお分かりになるかと思います。母の言葉ですけれども「水銀というものが私たちの川で発見されるもっと前、私の家族と私の先祖達は自然と調和した暮らしを続けていました。地球というのは私たちの家であり、私たちはその地球を再生させなければいけません。ただその再生にはかなり長い年月が掛かります。でも私達は、私達の母である地球をきちっと見ていくことで、母である地球は私達の事をまた守り、きちっと見てくれる。」

ところで水系の水銀に関してですけれども、洪水を防止するという理由で上流にダムと水力発電所が作られます。私たちのコミュニティの北の方になるんですけれども、その水力発電所が出来ることで、また他の汚染物質もこの地域に流れ込んできています。

失ったものと将来への希望

数年前ですが、私、熊本に参りまして水俣にも参っております。水俣病で苦しんでいる方達と会うことが出来ました。私はその人達と握手をし、病を抱えている人達と共に語り合う

ことができました。

私の母もやはり水銀中毒の症状を持っており、補償は受けています。私にとっては、家族の苦労を話すのは大変苦しいことです。でも私は出来る限り物事のよい面だけを見ていきたいと思っています。本当によい側面があるのならば、そこだけを見ていきたいと思っています。しかし、「進歩」「発展」という名の元に私たちはおおくの犠牲をはらい多くのものを失いました。

私達の方から頼んだわけでもなく、私達は汚染や環境破壊についての説明を受けたこともなく、とにかく何も知らされずにおりました。私は今、林業といいますか、木を切ったり、あるいは植林をしたりという仕事をしています。またかつては、漁師もしていましたし、フィッシングのガイドとして働いていたこともございました。また私のコミュニティで、木や動物が大切にされるようにと、自然保護の活動もしています。そして現在、先ほど申し上げましたイングリッシュ・ワビグーン・エデュケーション・ファンド・アクトのパネルのメンバーとして仕事をしておりまして、コーディネーターとして、とにかくより良い河川を取り戻すという業務についています。

今日、皆様にここで私の話をお聞き頂いたことを大変嬉しく思います。カナダそして私たちの地域では、人に話を聞いてもらうということそのものが、なかなか難しい事なのです。原田先生始めたくさんの方々が日本から来て、いろんなことを明らかにしていかれました。そしてそうした尽力によって、ようやく、私たちの目を開いたのです。45年も経って、初めてここで、カナダも日本と同じように、オープンにしていかなければならないという所に気付いた段階です。

私達の暮らしの環境はかなり変わってきているんですが、私達の生活そのものは、やはり過去の暮らしに従った形で日々の暮らしを送っております。魚を食べます、魚を獲ります。私自身18歳の時に初めて仕事を持ったのですが、それはリード製紙工場（汚染源となった企業）の新しい工場を作る際の仕事でありました。それが良かったのか、悪かったのか、ちょっと私の中では分かりません。その時18歳でしたから、水銀汚染の元となった製紙工場のために働いたということが良いことだったのか、馬鹿げたことだったのか、当時、私にはそこまでの思いはなかったのです。

これまでの生活はよい生活が出来てきたのかなと思うんですが、実は若い時に、誰かが私の所にやってきて、髪を切って毛髪を採取していきました。その後、何も連絡もなく、その髪の毛がどうなったのかも分かりません。私の所に来て髪を切っていた人間は知っておりますけど、おそらくオンタリオ州政府からの人だったんでしょうけど。じゃあその後、その髪がどうなったかっていうのは、全く知らされておりません。

皆様お忙しい中を、このフォーラムにご参加頂きましたことを、心から感謝申し上げたいと思っております。私を始め、いろんな地域からの代表者の話を、皆様にここで聞いて頂けました。まだこれから続きますけれども。本当に私達にとって素晴らしい機会が得られたと感謝しています。

ありがとうございました。メグウィッチ Megwatch,

参考文献

・原田正純、花田昌宣、田尻雅美ほか「カナダ・オンタリオ州先住民地区における水銀汚染－カナダ水俣病の35年間」『水俣学研究』第３号、熊本学園大学水俣学研究センター、2011年。
・水俣学研究センター編『水俣からのレイトレッスン』熊本学園大学水俣学ブックレット№９、熊本日日新聞社、2013年。